

役割アイデンティティとパーソンフッドの達成
ーゴフマンに拠って“自己の構築”アプローチを再構成するー

関西大学 中河伸俊

nobunaka@res.kutc.kansai-u.ac.jp

1. 問題の所在

社会学的探究を構築主義的に、つまりは社会学主義的（木戸・中河 2017:22）に「社会学主義」については補説 1 参照 →p.5] 押し進めていこうとすると、自己 self をどのような現象として思い描くのか（いわゆる「自己論」）は、その方法的プラットフォーム作りの重要なビルディングブロックになる。パーソンズのシステム理論がフロイトを流用し、それを批判するシンボリック相互作用論がミードに依拠するといったぐあいにⁱⁱ、これまでの主要な社会学「理論」はそれぞれのやり方で、その要となる自己論を調達してきた。その後も、二十世紀後半のいわゆる言語論（語用論）的転回ⁱⁱⁱを経て、さまざまに自己が論じられてきたが（ex. Holstein and Gubrium 1999; 片桐 2011）、それらは、いまだにそうした新しい知の構図に対応する経験的探究の苗床を十分に形作ってはいないと報告者は考える。いわゆる役割理論を語用論的関心に沿ってアップデートする形でサックスが創唱した成員カテゴリー化分析（MCA ; Sacks 1972, 1974; Hester and Eglin 1997; Francis and Hester 2004=2014）は、相互行為場面における「自己」の現れ方の経験的研究を前進させる大きなブレークスルーではあるが、それだけではまだ話の半分にすぎない。そこで、ゴフマンなのである。

2. 構築主義的自己論とパーソナル・アイデンティティ

報告者はすでに、自己論の経験的探究での使い勝手をよくするための概念整理の試みの中で（中河 2010）、まず、自我（ego）と自己（self）を峻別する必要があることを確認したあと（cf. 酒井 2005）^{iv}、社会学は古典段階においてすでに、(A)文化的なリソースの配置や歴史に目を向ける「表象としての自己」論（デュルケム）^v、(B)社会的なやりとり（interaction）の中での自己の達成に注目する「過程としての自己」論（ミード）、(C) “無数の糸の交点”として個人を概念化する「関係の結節点としての自己」論（ジンメル）^{vi}という、三種類の「わたし」現象へのアプローチの系譜を準備していたと指摘した。アーヴィング・ゴフマンの自己論のレガシーは、この(A)と(B)の二つの系譜（デュルケミアンとミューディア）が合流する地点に位置し^{vii}、対面的状況における個人の人格（personhood）の相互行為的達成の理解を助けるさまざまな洞察が含まれているという点で、いまだにその意義を失っていない。

従来、自己は、社会学の概説や教科書などでは、マイクロ/マクロという方法論的妥当性

が疑わしい線引きに依拠して「ミクロ」の現象とされ、一般に、上の (B) の系譜に当たるシカゴ学派～ネオシカゴ学派 (≡シンボリック相互作用論) の学的ホームグラウンドと目されてきた。この系譜の議論は、基本的に「構成主義的 [構築主義的] 自己論」、つまり、「自己は自己言及によってそのたびにある人物と同一の対象として構成される」と主張する哲学的立場と重なりあう (中山 2012:82) viii. この立場からみれば、いわゆる自己同一性は、状況依存的に達成される事柄である (同書 84)。アイデンティティを、「おまえは・自分は・あの人は何者なのか」という、^{アイデンティフィケーション} 同定のための問いへの答えと解するなら、その問いと答えのいずれもが、具体的な社会的場面での相互行為の文脈に依存することは明らかだからだ。その答えは、大きく、(1)従来「役割」と呼ばれてきた社会的な属性のカテゴリー (大人、子ども、男、女、親、子、姉、兄、祖母、孫、フランス人、日本人、白人、先住民、主婦、学生、〇〇社の社員、落研のメンバー、広島ファン、関西人、鉄ちゃん、アイマスのプロデューサー…) ixと、(2)パーソナルな「固有名」(「わたくし、鶴下幸蔵と申す者です」) の二つに類別できる。ゴフマンの『スティグマ』(Goffman 1963=2003) での用語にならって、前者が指すものを社会的アイデンティティ (社会的 ID)、後者が指すものをパーソナル・アイデンティティ (パーソナル ID) と呼びたい x (ちなみに ID カードや名刺の表示は通常、その用途にとって有^{レリヴァント}効だと予想される特定の(1)+(2)のセットになっている)。しばしば多元的自己 (あるいは役割葛藤や役割パフォーマンスの^{コンパートメンタリゼーション}区画化) との絡みで語られるとおり、特定の個人 (パーソン) が担い手になることが可能な社会的 ID は数多くあり、そして実際の相互行為場面においてはつねにそのうちの一部しか^{アクティヴェイト}活性化されない。また、相互行為場面の文脈によって、社会的 ID に基づく役割関係が優勢でパーソナル ID が後景化されることもあれば、逆に、パーソナル ID が前面に出るやりとりもある xi. しかし、前者の場合でも (そしてそれが対面状況ではなくメディアを介するものであるときであっても)、私たちは、「役割の仮面」の背後に、固有の名前と身体と意識と^{バイオグラフィー}個人史をそなえたパーソンがいると (多くの場合暗黙裡に) 想定している。

3. 役割—パーソン複合体 (role-person complex)

役割の仮面とその背後の「素顔」のその人、あるいは、ビュフェでの食事で私たちが皿に取る各種の料理のようなものとしての社会的 ID (役割) と、それを載せる皿のようなものとしての、不変性もしくは連続性をそなえた実体である^{パーソン}個人 xii. こうした対照は、日常的、および学問的 (とりわけ心理学的) 推論のいずれにおいてもよくみられるものだ xiii. しかしながら、ゴフマニアン (遑つていえばデュルケミアン) の立場をとるなら、パーソンもまた、役割と選ぶところのない社会的構成物なのである xiv. 社会的 ID とパーソナル ID の位置関係について、ここではとりあえず三つのことをいっておきたい。第一に、前者のないところに後者はない。言い換えれば、各種の役割カテゴリーとそれを裏づける社会的場面を参照しない形での、パーソンのイメージを構成する作業はありえない。ゴフマンの

役割距離のメタファー (Goffman 1961a=1974) が明らかにしたように、パーソナリティ (特定のパーソンがそなえているとされる諸「内面的」属性の総合) は、ある意味で、社会的役割のカテゴリーを参照するという行いの効果の一つなのだ xv. 第二に、以上の理由から、社会的 ID とパーソナル ID は切り離してではなく、その都度的に相互反映的に成り立つ“役割—パーソン複合体”として理解されるべきである。家族水入らずの食事や教室、職場でのデスクワーク、商店での買い物、デート、調査会社員による信用調査の作業等々、やりとりの場面によって (さらにいえば一つのやりとりの中で刻々と移ろう相互行為者の志向の変化によって)、各種の社会的 ID とパーソナル ID のどちらがどのように有意なものになるかは異なる。そこではしばしば、同じカード (行為者が相互行為の場面で読み取り可能な情報、およびあらかじめ知っていてその場で想起可能な属性やエピソードの情報) が、役割とパーソンのどちら (さらにはその人が担いうる複数の役割のうちのどの役割) が焦点化されるかによって、ゲシュタルト変換の一環として、別様に見えることになる xvi. 第三に、パーソナル ID の構成は、ゴフマンがアイデンティティ・ペグと呼ぶ、名前 (固有名詞) や顔や体つきや声や見かけ等々の個人の弁別と同定に使われる諸要素を核とし、その周囲に「その人」についてのさまざまな情報をくっつけていく形で行われるが xvii, そうした「その人」の構成の作業において材料として決定的に重要な個人史的な情報のほとんどが、その人が担う (あるいは担ってきた) 社会的 ID に関わる事項の列挙によって形作られるという点も再確認しておく必要がある。

ゴフマンにいわせれば、私たちの日常生活に句読点を打つ相互行為儀礼は、パーソンを「聖なるものとして」礼拝する (ことを通じてそれを構成する) いとなみなのであり (Goffman 1967=2002), そしてスティグマもまた、単なる社会的 ID の問題ではなく、さまざまな種類の「人柄を傷つけるような (discrediting) 属性」についての情報 (ex. 各種の集会的または個人的な逸脱カテゴリー) がもたらすパーソナル ID の汚染なのである (Goffman 1963=2003). たとえば、米国の都市の街頭で深夜にパトロール中の警察官が、行き会ったアフリカン・アメリカンの若い男性に対して大いに警戒しつつ不審尋問を試みるとしたら、それは、大柄な「黒人」の「男性」で「(反社会的な人間を含む蓋然性が高い) アンダークラス」の「若者」といった、見かけや、体つきや、肌の色や、服装から読みとれる個別の社会的 ID 関連情報の単なる集積ではなく、眼の前で自分に対峙する「危険 (である可能性が大きい) 人物」としての、匿名的ではあるが等身大の「人物像」の構成の結果であるだろう。

4. 「まったきパーソンフード」の構成

他者、つまり、私たちが会おう具体的、個別的な個人は、何重もの意味で社会的に構成された現象であるにもかかわらず xviii, そして、その人の役割—パーソン複合体の要素として帰属しうる情報のごく一部しか参照できていないにも関わらず、日常のやりとりの場面の中で、一定のトータリティをそなえた「その人」として現前する (あるいは脳裏に立ち現

われる)。それを可能にするのはおそらく、近年チンパンジーと人間の子どものお絵描きの比較実験でも明らかにされたような^{xix}、ヒトに固有の、全体像を思い描いて情報の欠落を埋め、点と点、線と線をつなぐ構成的な認知作業の能力である。そうした能力を駆使して、私たちは、手元の限られた情報をつないで人物像を構成する。その構成に当たっては、ゴフマンの示唆をベースに^{xx} 報告者が論じた「ふつう」の想定（中河 2006a,b）という認識の様式が威力を発揮すると考えられる。これは、「表示されない、もしくは情報が得られない属性項目については、そのパーソンは『ふつう』である、もしくは『典型的』である」と想定するという認識の様式である。この「ふつう」や「典型的」は難物で（倉本 2006）、その状況・文脈依存性のゆえに幾筋縄でもなかなかうまく捕捉できない曲者（したがって重要な研究課題）なのだが、それは当然文化的=常識的な知をリソースにするものなのである。

パーソンの構成にあたって用いられる「人びとの方法」を明らかにするにはもちろん、私たち自身の日常生活を対象にしたエスノグラフィックな研究を蓄積する必要があるが、ここではそれに加えて、ゴフマンが『行為と演技』（Goffman 1959=1974）で演劇を引き合いに出して行ったような、作り物=虚構の製作物を補助線に使う手法も試してみる値打ちがあると提言したい（ex. TV ドラマや小説や歌やマンガや落語の登場人物はどんなふうにしてキャラクターとしてのパーソナリティを獲得するか、アニメのヒロインはどのようにして「おれの嫁」になるか）。作り物と「日常世界」との相同性と違いを見極めるためには、^{フレミング・コンヴェンション} フレーム化の慣行（Goffman 1974; 中河 2015, 2016）の研究が必要だが^{xxi}、それはおそらく日常の相互行為を理解するための補助線としても役立つだろう。

ここで改めて強調しておきたいのは、パーソンフッドは社会的／相互行為的構成物だというテーゼは、社会学的探究にとっては、結論ではなく出発点にすぎないということである。パーソンとそのパーソナリティ属性（人格や性格や気質、「キャラ」等々）の同定の試みは、その学問的ヴァージョン（渡邊 2010； 中間 2012）の査定はここではさておいて、私たちがそれを日常生活の中で、他者の行為の予測可能性を高める（と思しき）判断材料として実際にしばしば使うという点に注目すべきなのである^{xxii}。「あの人はこういう性格だから」「あいつはXXキャラだし」といった定式化を使って私たちが何をしているかを解明することは、「それが本当に予測可能性を高めているのか」といった問いとは別種の、パーソナル ID のコミュニケーション論的研究の重要なトピックでありうる。

5. 結びもしくは蛇足

ゴフマンの初期の本は一般書として広く受け入れられたし、また、彼がかなり戦略的に作り出したタームやそれについての例示は、講義などでもしばしば「あるある」感を伴って受け入れられる（つまりうまく話せば結構「受ける」）。しかしいっぽうで、彼のデータの種類と使い方については、古くから（とくにエスノメソドロジー／会話分析方面から）批判がある。恣意的で、自分の主張にとって都合がよい材料ばかりを集めて示している、あん

なやり方なら何でもいえるという酷評さえある、いわゆる質的調査において、データの身分はどのようなものなのか、データは何を示すのか（示すべきなのか）については、いまだに大いに議論の余地があるといえが、とはいえ、ゴフマンの考察や分析のある部分については、ある種のデータが傍証としてあれば、説得力を高めることができたのではないかと思われる。それは、具体的にいえば、日常場面における相互行為切片のフィールドノートである [実例については、補説2参照 →p.7]。ゴフマンは日常の相互行為の詳細についての観察力と記憶力に長けた人だったといわれるが、そうした才に恵まれない私たちにとって、会話分析（事前に録音機材や撮影機材をセットする必要がある）では捉えきれない日常のやりとり内の小さなエピソードを、フィールドノートを書きつけるというやり方でデータ化することは、観察力と分析力を磨くという見地からも、有用な方法になりうるだろう xxiii.

【補説1】社会学主義と生物学主義

ここでいう社会学主義 (sociologism) とは、一言でいえば、社会学は、生物学や心理学、経済学など他学のそれに還元できない固有の研究対象の領域（社会的事実もしくは「社会的なもの」）を確保しようという、一つの学問領域としてきわめて当たり前な立場のことである。当たり前とはいいいながら、社会学内部にもホマンズやゲーム理論を始めとした心理還元主義があるし、往年のマルクス主義社会学の公式ヴァージョンは一種の「下部構造還元主義」をとっていたから、「還元主義に与しない」といっておくことにはそれなりの意義がある。さらにいえば、社会学には、方法的個人主義 vs. 方法的全体主義のように、研究対象である「社会的なもの」をどのような性質のものとするかをめぐって、いまや古典的といっている対立があり、それが調査研究の方法はどうあるべきかという方法論の問題と連動して、おさまりの悪い状況を生み出している。そんななかで、他の学問分野にはない社会学ならではの対象の概念化と知見の組織化の学的先例を自らの財産目録の中から洗い出す作業のスローガンとしても、社会学主義ということばは有用であるだろう。構築主義とは、「語用論的転回」（注 ii）以降の現在にふさわしい方法論的整備を求める社会学主義の一つの現れだったと思うし、そして、報告者は個人的には、さまざまな構築主義の中でも（中河 2013）、エスノメソドロロジーとゴフマンの知恵に学ぶ構築主義アプローチを、健全な社会学の経験的探究の選択肢の一つとして推奨する立場をとる。

ここで確認しておきたいのは、社会学主義は、社会学帝国主義（この学問領域の命名者コントにおいてすでに胚胎していた？）とは違うということである。社会学主義の他学へのスタンスは、本領安堵を求めるという控えめなものだ。そして、社会学が固有の研究対象を持つという主張を、生物学への還元主義に論駁する形で示すのは比較的簡単だと思われる。

尾上正人氏は、この部会の第一報告「ブランクスレート・マキャベリの知性・欺瞞—社会生物学による社会構築主義の否定と吸収」の報告要旨で、社会構築主義を社会学の伝統

に根ざす「空白の石版」的思考の一分枝と位置づけ、それを誤ったものとして否定するとともに、その「遺産」を社会生物学に吸収すると宣言する。しかし、社会学主義＝社会構築主義は、必ずしもブランクスレートの想定をとる必要はない（科学的知識の社会学やポスト構造主義的・ポストモダン論的なあれこれの議論など、「言語偏重」のそのようなタイプの「構築主義」が流行ったことがあったのは事実だが）^{xxiv}。エスノメソドロジストなら、そもそもその種の想定や哲学的な立場設定に対していずれにも与しない不関与の立場をとるだろうし、EMの探究プロジェクトはそれで差し支えなく成り立つ（Francis and Hester 2004=2014）。いっぽう、ゴフマンは、バードウィステルや人間行動学、ベイトソンに部分的共感を示し、欺瞞（fabrication）のフレームについての議論では、動物の擬態の事例に触れたりもする（Goffman 1974）。しかしながら、彼のレガシーもまた、社会学ならではの対象についての知見を示しているという意味で、社会学主義の旗の下にある。

生物学への還元論に対して、社会学が論駁するのは簡単である。社会学主義者（穏健な）は自分たちに固有の経験的对象があるということを示せばいいだけなのに、帝国主義的な生物学主義者は、それが無い（もしくはあってもごく些^{トリヴィアル}細なものである）ということを示さなければならない。人間をめぐるさまざまな事象に、生物学的基礎を認めることは社会学主義にとって致命傷にはならない（たとえば、感情と感情表出についてのダーウィンの生物学的貢献を認めた上で、ゴフマンの系譜をひくホックシールドは、独自の社会学的な感情管理論を提示することができた（Hochschild 1983=2000））。生物学的基礎と「社会的なもの」をつながりはあるが相対的に独立したものとして位置づける古典的な議論は、人の生活（生存）上の必要に基づく活動が遊戯や芸術に変換されるという事態に注目した、ジンメル「軸の回転」（Simmel 1917=2004:61）についてのものである（これは、ゴフマンのフレーム分析における転調 keying という発想の、著述（Goffman 1974）中に明示されているカイヨワやベイトソンよりも古いネタ元の一つである可能性がある）。軸の回転によって、生物学的基礎をもつさまざまな活動は、ジンメルにいわせればたぶん「社会的」な、別のレベルの社会的な事象に変わる。たとえば、食（⇔個体の存続）と性（⇔種の存続）という生物にとって基本的な事柄（二大本能？）をめぐる人の社会的いとなみについて考えてみるとよい。前者については、当のジンメルが「食事の社会学」（Simmel 1910=2004）が、「原初的に生理学的な」その現象がいかに多種多様な形で社会的なものとして組織化されてきたかを論じている。いっぽう、性については、ある特殊なタイプの性的実践が、アダルトビデオという「作り物」を媒介にしていかに日本社会に導入され普及したかを探った永井の労作（永井 1992）を、例として挙げておこう。これらで扱われているような現象を、生物学還元主義は、どのようにして研究と説明の対象にすることができるのか。私たちが、このような（あるいはもっと別の種類の）人びとが行うこと（games people play）を適切な方法で観察し、記述と考察の対象にするかぎりにおいて、社会学主義（穏健な）は、その本領を安堵しつづけるだろう。

【補説 2】 日常のやりとりについてのフィールドノーツ作り

日常の暮らしの中で自身が参与した、もしくは観察したやりとりの切片 (strip) が、自らの研究関心に関連した「使える」ものだと判断したときに、できるだけ時間をおかずそのやりとりの重要だと思われる諸特徴を記録し、ミニ・フィールドノーツを作る作業のことである。会話やビデオの録音に比べればもちろん精度では劣る。しかし、興味深い相互行為的エピソードに、録音の準備がなくても即対応できるという機動性は、とりわけゴフマニアンの研究スタイルには適合的である。もちろん、特定の「興味深い」諸特徴に焦点化して書かれたノーツには、会話データのような汎用性はないし、また特定の研究関心の思い入れが浸透したデータになってしまうおそれもないではない。しかし、観察力と記述力を磨くことによって、使用に耐えるデータを得ることができるだろう。

以下は、日常のコミュニケーションでの笑いの多相的なはたらきを解明するために (中河 2016)、会話データと併用することを目指して、試行的に作られたノーツである。まだ不十分なものだが、報告者がどんなことをしようと提案しているのか、その方向性は何かわかっていただけだろう。

【事例 1】

地方都市の百貨店の前の通りの歩道の、私 [筆者] の前を、2 人の中老年女性が、話しながら並んで歩いていた。右側の女性は小さな室内犬をリードでつないで先を歩かせており、左側の女性は同じくらいの大きさの室内犬を、身体の左側に犬の頭が来るように抱きかかえていた。先を急ぐ私が、2 人を左側から追い越しかけたときに、抱かれている犬が私に向かって wan! と吠えた。吠えられたことを理解した直後に、私は haha と少し大きめの歯切れのいい笑い声をあげ、そのまま姿勢も歩行速度も変えずに、2 人を追い越して先へ進んだ。[2015 年 12 月 10 日 10 時半過ぎに、JR 高槻駅前エリアで起こった出来事を、直後に西武百貨店地下食料品売り場の椅子に座って書き留めた日常生活のフィールドノーツ。このデータの具体的な使われ方については、中河 (2016:2) を参照のこと]

【事例 2】

[2015-04-16 7:53 ごろ/7 時 55 分に発車する JR 高槻駅北口発・関西大学行きのバス内にて] 最後尾の 5~6 人掛けの座席の左 (低床の乗車口がある側) の窓際に座っていた女子学生と、その右隣りに座る女子学生、そしてその右斜め前に当たる通路の末尾に立っている男子学生が会話を交わしており、かれらは明らかに知り合いであると見て取れた (私=筆者は、最後尾座席の 2 人の女子学生の右隣り、その長い座席に掛ける 5 人の真ん中に座っており、つまり 3 人のやりとりを eavesdropper としてよく見聞きできる位置にいた)。バスの発車時間が近づくにつれて車内は込み合ってきており、とりわけ、乗車口から入ってすぐのあたりがよく込んでいるようだった。最後尾

座席の左窓際の女子学生が、窓から外を見ていて、知っている（たぶん3人ともが）男子学生が、バスに乗ろうと走って来るのを見つけ、その名前を挙げて、走ってくるさまを実況した。その男子学生は走ってきて、乗車口からバスに乗りこもうとして、しかしステップ部に立っている複数の乗客の身体に阻まれて、乗ろうとしたが乗れなかった、という経緯が、左窓際の女子学生のアナウンス（および私の位置からではごく限定的な窓越しの視界）からわかった。左端の女子学生は、その男子学生が乗ろうとして乗れなかったこと（あるいは乗るのを断念したこと）を見て笑い、「○○（その男子学生のもと思われる姓）、乗れへんかった」と、「笑いの対象をめぐる活動をトピックにした発話」（グレン）を行って、また笑った。その女子学生の右斜め前の通路に立つ、乗車口が背中側にあるために走ってきた男子学生が乗れ（ら）なかったという経緯を目撃できなかった男子学生も、その女子学生の報告を聞いて笑った（私と左端の女子学生との間に座る、もう1人の女子学生が笑ったかどうかは確認できなかった）。[中河の前期論文の拡充版に、注記として加えた事例。やりとりの参与者を面と向かって笑うことは通常抑制されるが、「その場にはいない laughable な人物を対象にする、場の参与者にとって affiliative な笑いを気前よく乗せた発話の連鎖が続く」という、会話の連鎖の中での笑いについての会話分析系の知見を膨らませる試みに有効な事例として提示された]

【事例3】

[2017-09-14 10:45 ごろ/JR 高槻駅北口方面のコンビニにて] 週刊誌（SB誌）をレジに持って行った私〔筆者〕は、財布には1万円札しかないが、片手に持っていたリュックの奥の方に別に千円札が何枚かあるのを思い出し、リュックの中を探してそれを見つけ出して、そのうちの一枚を端数の10円玉とともに店員に渡した。つり銭の100円玉とレシートを受け取り、後ろにもう1人待っているお客がいるので、ややあわてて荷物や財布の整理をしつつ（残りの千円札をつり銭といっしょに財布に入れ、財布をリュックにしまうという作業をしながら）、レジに背を向けて去ろうとすると；店員「あ、本、本を・・・」

私「あ・・・、ばはははははは」

店員は顔につられ笑い（あるいはお追従笑い？）を示しつつ、私に、袋に入れた買った週刊誌を手渡した。[これは、上記の関心から今もつけているノーツの「新ネタ」である。私の笑いがどんな心理からもたされたのか、という内省アプローチは、あまり役に立たない。テニスや卓球で、飛んできたタマを打ち返すようなタイミングで、とっさに出た笑いだからである。これが、謝意の表示や、自己卑下とてれの表示（「あほやね、私」）、そしてやりとりの終わりを示すジェスチャーがあってもおかしくない場所に現れたことをどう分析するかは、これからの課題である。]

【参考文献】

- 芦川晋, 2015, 「自己に生まれてくる隙間—ゴフマン理論から読み解く自己の構成」 中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』新曜社 pp.46-71.
- , 2017, 「『自己』の『社会的構築』—昔から社会学者は『自己の構成』について語り続けているが一体どこが変わったのか?」『社会学評論』269:102-117.
- Douglas, Mary, 1970, *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*, London: Barrie & Rockliff, Cresset Press (江河徹・塚本利明・木下卓『象徴としての身体—コスモロジーの探究』紀伊國屋書店 1983).
- Erikson, Erik, 1959, *Psychological Issues: Identity and Life Circle*, New York: International Universities Press (小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 1973).
- Francis, David, and Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, London, Sage (中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳『エスノメソロジーへの招待—言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版 2014).
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday (石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房 1974).
- 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New York: Prentice-Hall (石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ (改訂版)』せりか書房 2001).
- 1961a, “Role Distance,” in *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, New York: Bobbs-Merrill, pp.83-152 (「役割距離」, 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学』誠信書房 1974 83-172 頁).
- 1961b, *Asylums: Essays on the Condition of the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, NY: Anchor Books (石黒毅訳『アサイラム—施設被収容者の日常世界』誠信書房 1984).
- 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, NY: Anchor Books (浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学 [新訳版]』法政大学出版社 2002).
- 1974, *Fame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, NY: Harper & Row.
- Hester, Stephen and Peter Eglin (ed.), 1997, *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, Washington, DC: International Institute for Ethnomethodology and Conversational Analysis and University Press of America.
- Hochschild, Arlie R., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, Berkley: the University of California Press (石川准・室伏亜希『管理される心—感情が商品に

なるとき』世界思想社 2000).

Gubrium, Jaber F., and James A. Holstein, 1995, "Life Course Malleability: Biographical Work and Deprivatization," *Sociological Inquiry* 65, no. 2: 207–23.

Hacking, Ian, 1999, *The Social Construction of What?*, Cambridge, MA: Harvard University Press (出口康夫・久米暁『何が社会的に構成されるのか』岩波書店 2006).

Holstein, James A. and Jaber F. Gubrium, 1999, *The Self We Live By: Narrative Identity in a Postmodern World*, New York, Oxford University Press.

片桐雅隆, 2011, 『自己の発見—社会学史のフロンティア』世界思想社.

桂米朝, 1986, 『落語と私』文藝春秋.

木戸功・中河伸俊, 2017, 「特集『社会学と構築主義の現在』によせて」『社会学評論』269:17-24.

倉本智明, 2006, 『だれか, ふつうを教えてください!』理論社.

永井良和, 1992, 「アダルトビデオと欲望の変容」『ポップ・コミュニケーション全書』PARCO 出版 pp.178-207.

中間玲子, 2012, 「人格心理学における自己論の流れ」梶田叡一・溝上慎一編『自己の心理学のために』世界思想社 pp.44-62.

中河伸俊, 2006a, 「相互行為場面におけるスティグマ排除と包摂をめぐる感受概念の経験的有用性と実践的インプリケーション」『スティグマの相互行為的マネジメントと文化的構成の研究 (平成 16~17 年度科学研究費 (基盤研究(C)) 研究成果報告書)』大阪府立大学人間社会学部社会学研究会 1-18 頁.

----- 2006b, 「相互行為現象としてのスティグマ」(10 月 1 日に京都府立大学で開催された日本社会病理学会第 22 回大会での自由報告の配布資料).

----- 2010, 「『自己』への相互行為論アプローチ: 経験的探究に有効な再定式化のために」『人文学論集』大阪府立大学人文学会, 28:45-71.

----- 2013, 「構築主義で何をするのか—経験的探究の方途の成熟のために」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房 pp.1-13.

----- 2015, 「フレーム分析はどこまで実用的か」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』新曜社 pp.138-141.

----- 2016, 「談話標識としての笑いと『お笑い』: フレーム分析の実用のための試行的検討」『同志社社会学研究』同志社社会学研究会, 20:1-17.

中山康雄, 2009, 『現代唯名論の構築—歴史の哲学への応用』春秋社.

----- 2012, 『示される自己—自己概念の哲学的分析』春秋社.

Sacks, Harvey, 1972a, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology," in David Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, New York, Free Press, pp. 31–74.

----- 1974, "On the Analyzability of Stories by Children," in Roy Turner (ed.),

Ethnomethodology, Harmondsworth, Penguin, pp. 216–232.

酒井潔, 2005, 『自我の哲学史』 講談社.

阪本俊生, 2009, 『ポスト・プライバシー』 青弓社.

Simmel, Georg, 1890, *Über sociale Differenzierung*, Duncker & Humboldt (石川晃弘・鈴木春男訳『社会的分化論—社会学的・心理学的研究』中央公論新社 2011).

----- 1910, *Soziologie der Mahlzeit*, ex. *Der Zeitgeist*, Beiblatt zum Berliner Tageblatt, Nr. 41, vom 10 (居安正訳『社会学の根本問題 (個人と社会)』世界思想社 2004 pp.155-167)

----- 1917, *Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)*, Berlin: G.J. Göschen (居安正訳『社会学の根本問題 (個人と社会)』世界思想社 2004 pp.1-121).

薄井明, 2013, 「ゴフマンの『隠れジンメリアン』疑惑—従来のゴフマン理解の見直し」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 20:7-20.

安川一・杉山あかし, 1991, 「生活世界の情報化」 児島和人編『講座社会学 8 社会情報』 東大出版会 pp.73-115.

渡邊芳之, 2010, 『性格とはなんだったのか—心理学と日常観念』 新曜社.

Winch, Peter, 1958, *The Idea of a Social Science and Its Relation to Philosophy*. London: Routledge. (森川真規雄訳『社会科学の理念—ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』 新曜社 1977).

Woolgar, Steve (ed.), 1993, *Knowledge and Reflexivity: New Frontiers in the Sociology of Knowledge*, London: Sage.

Woolgar, Steve, and Dorothy Pawluch, 1985a, “Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations”, *Social Problems* 32: 214-227 (平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング—社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 18-45 頁 2000).

—— 1985b, “How Shall We Move Beyond Constructionism?” *Social Problems* 33: 159-162.

i 松木洋人 (大阪市立大学) がオーガナイザーになったこのテーマセッション, 「方法としての構築主義の遺産を査定する」の, 企画の趣旨は次のとおりである. <1990年の『社会問題の構築』の邦訳刊行をきっかけとして, 構築主義的アプローチは, 日本の社会学に本格的に紹介された. その後, 世紀の変わり目には一種の知的流行となったが, その流行が過ぎ去る頃には, 「…は社会的構築である」と論じることは陳腐なクリシェになっていた. /もちろん, このアプローチのプロモーター役を担ってきた中河伸俊が繰り返し強調してきたように, 社会問題の構築主義に代表される構築主義的アプローチの眼目は, 人々の目から鱗を落とすことではなく, もろもろの現象の社会的構築のプロセスの研究にあり, 実際, この間, 四半世紀にわたって, このアプローチを採用したり, それに触発されたりした経験的研究の蓄積は続いている. だとすれば, 「構築」が陳腐なクリシェになった後も, 社会学者が構築プロセスの研究を続けることは可能であり

有意義でもあるということになる。／しかし他方で、クレーム申し立て活動の連鎖に焦点化する社会問題研究の領域を越えて、主題、データ、分析の手法など、実に多様な自称・他称の構築主義的研究が生み出されることによって、構築主義的であることの意味はかなり曖昧になっている。言い換えれば、『方法としての構築主義』という論集のタイトルにあるように、構築主義を社会学の「方法」であると捉えたとき、それを採用することによって何が出来るようになるのかは必ずしも明確ではなくなっている。しかし、社会現象が人々の実践によってつくられるものであること自体は、社会学の基本的な認識である以上、構築主義が独自の方法であると主張するためには、このことは避けて通れない問題であるはずだ。／そこで本セッションでは、構築主義が経験的な社会学研究の方法として何を遺してきたのかを評価することを試みたい。経験的データの分析を伴う報告も方法論のみについて検討する報告も歓迎するが、方法としての構築主義がどのような独自の遺産を遺してきたのか、そして、われわれはそのどの部分を相続すべきなのか、あるいは、負の遺産ばかりが多くて相続を放棄すべきなのかなどについて議論する報告の応募を期待している。＞本報告はこのセッションの第5報告であり、その前に以下の4つの報告が行われた。(1)「ブランクスレート・マキャヴェリの知性・欺瞞——社会生物学による社会構築主義の否定と吸収」尾上正人(奈良大学)、(2)「Joel Best のレトリック分析を応用したクレームの相互作用の分析」佐藤寿昭(東京大学)、(3)「社会問題の構築主義における『専門家』に関する再検討——A. アボットの専門職論の考察をとおして」岡村逸郎(筑波大学)、(4)「問題経験の社会学再考——<ギャンブル依存症>の問題経験をめぐるナタティヴ・ワークから考える」福重清(立教大学)。

ii 有名なフロイトのエス・エゴ(自我)・スーパーエゴ(超自我)の三層構造モデルは、本能の生物学的エネルギーを動力源としつつ、文化(の代理人たるスーパーエゴ)の監視力によってかろうじて制御され秩序を守る人間という、ある意味できわめてペシミスティックな人間学アントロポロジー(cf. 「死の本能」の発現としての戦争)に裏打ちされていたが、パーソンズはそこから文化の社会化を通じた社会秩序の達成という楽観的な図柄のみを抜き出して強調し、その社会システム概念の礎にした。この選択のため、パーソンズの社会理論は、人間の主体性を重視する行為論(主意主義)が話の出発点であったにもかかわらず(唯物史観の決定論をウェーバーに傾斜しつつ斥けるにはそうでなければならなかっただろう)、ミードのような自省(⇔自己対象化)のモメント、言い換えれば自己(self)をめぐる議論を欠いた論理構成になってしまい、弟子のガーフィンケルにさえ「判断力喪失者(judgemental dope)」の人間像を前提していると批判されることになった。したがって、ことパーソニアンとミーディアンの人間観の対立については、構築主義者としては、後者に肩入れせざるをえない。付言するなら、ゴフマンの自己論は、そこから先に進んで、芦川が「それをめぐる主体の作動を可能にする隙間、つまり選択の余地があることが自己の成立要件である」というテーゼで明らかにしたように(芦川 2015:69-70)、ヘーゲルの弁証法の援用であり形而上学的(というか非経験的)性格をまだ払拭できていないミードのI/MEの対話モデルを、社会学化する(経験的吟味の手が届くものに作り変える)方向へと展開したのもであった。

iii 「語用論的転回 pragmatic turn」という言い回しは、馬場靖雄の学会発表原稿「ルーマンの68年」(関西社会学会第52回大会, 2001年5月26日 http://socio-logic.jp/baba/68/68_01.php @『日曜社会学』)の注10からの借用である。哲学における近年のプラグマティズムの再評価(ローティなど)と必ずしも直結するものではなく、むしろ、言語学の領域で、ソシュールの構造言語学からチョムスキーの生成文法に至る流れが隆盛を誇ったあと、具体的な言語の使用場面に焦点を合せる語用論的研究(オースティンとサールの発話行為論からグライスの協調性の原理論、レヴィンソンらのポライトネスの研究からエスノグラフィー・オヴ・スピーチまで)が新たな展開をとげたのに対応する形で、さまざまな社会的場面における言語的・非言語的な相互行為が、社会学やコミュニケーション研究の具体的な調査対象として焦点化されつつあることに、報告者はこのタームを当てる。

iv あるいは、中山(2012)の用語を借りるなら「主体的私(主体としての自己)」と「客体的私(客体としての自己)」。前者の概念化の嚆矢はデカルトのコギトであり、後年にキルケゴールが自我と自己を区別し、自己を「ひとつの関係、その関係自身に関係する関係」(酒井 2005:97)

として定式化したのが、自己という概念のルーツなのだが、この区分はいまだに社会学において徹底して共有されているとはいえない (ex. Holstein and Gubrium 1999; 船津 2005). この二つの種別の「わたし」を弁証法的に統合して理解しようというのが、ウィリアム・ジェイムズから G・H・ミードに至る米国のプラグマティスト (ネオシカゴ学派のルーツのひとつ) の試みだった。

v おそらく、フーコーの「自己のテクノロジー」論も、このデュルケミアンの自己論の系譜につながるものとして理解し、ゴフマンとの異同を吟味することによって、その議論の学的な位置価と社会学の探究にとっての意義をより明確にできるだろうというのが、報告者のあてずっぽうに近い読みである。

vi 「[...] 一つの集団に所属すると、個性にとってはそれだけ広い活動領域が与えられることになる、他方それが多くなればなるほど、ますます他の人間が同じような集団の組み合わせをみせるということはなくなる、つまり、これらの多くの圏がもう一度同じ一つの点で交差するということは、みられなくなるのである、[...] すなわち人格は、もともとは単に無数の社会的な糸の交錯する点にすぎない、つまりそれは、たださまざまな圏と適応期から伝えられたものの結果にすぎないのである、だが、それは、種族的要素がその人格のなかで一緒になる場合の量と組合せの特殊性によって、個性となるのである。」 (Simmel 1890=2011:170-172) このジンメルネットワーク社会論とそれを踏まえた情報 (知識) の伝達論をまるで予見したかのような発想は示唆に富むが、それはまだ今のところ他の二つのように十全な自己論の系譜として十全に展開されてはいない。

vii と同時にゴフマンが、シカゴ学派経由でジンメルの影響も受けていることが、近年、着実な考証作業によって明らかになってきている (薄井 2013). ゴフマンの自己論がジンメルのそのの所説をどの程度取り入れたかについては、今後の学説史的研究課題だといえよう。

viii 中山が論敵としてこの構成主義的自己論に対置するのは、「自己言及の実践にかかわらず自己は存在する」と主張する本質主義的自己論であり (中山 2012:82), 永井均の独我論的自己をめぐる議論がそれに当たるとされる。なお、「自己指示」とは、「示し的一种であり、自己を指示するような示しである。」 (同書 83). つまり、人が「自己」を獲得することは、ヒトが幼時から示す鏡像の理解および利用能力 (知られている範囲ではチンパンジーのみがそれに準じる能力を発揮する) と同種の、自己対象化の能力の発露なのである。なお、中山は同書で、哲学的な議論のために、「自己による自己の指し示し」のみに限定して話を進めるが、**games people play** (人びとが行っていること) を同定しようとする社会学者にとってはより幅広い、相互行為の中での／を通じての、自他による、自他の「自己」のさまざまな形での組織化と達成 (そこにはもちろん『行為と演技』(Goffman 1959=1974) で焦点化された行為者の **performance** とそのオーディエンスによる **appreciation** も含まれる) が関心の対象にならざるをえない。

ix こうしたカテゴリーには、そのカテゴリー化の基盤が集団や集合体 (人類学者ダグラスがいうところの **group**) であるものと、個人間の社会関係の網の目 (同じく彼女の用語でいえば **grid**) の二種類があることは、概念分析的にみても押さえておくべき点だろう (Douglas 1970=1983).

x ミード、ブルーマー、ベッカーから、いわゆる構築主義的自己論や近年の自己物語論までを系統的に吟味した芦川は、ゴフマンを除くそれらの不十分さの「もっとも顕著な例」は、『自己』と『パーソナル・アイデンティティ』を区別できない点にある (芦川 2017:68) と指摘する (ただし、ベッカーのみは、逸脱者の生活誌的バイオグラフィカルなキャリアやパーソナル・アイデンティティへの逸脱のレッテル貼りといったゴフマンにきわめて近い発想に到達していたとするが)。

xi たとえば、列車の座席に座って切符の検札を受けるときや宝くじ売り場の窓口でくじを買うとき、その作業に当たって重要なのは、車掌ついで—乗客や売り子—お客という社会的 ID のペア (カテゴリー対) であり、車掌や売り子が胸に名札をつけていても、客の側がそれをモニターすることはまれだろうし、ましてや客が名前を尋ねられることなど (よほど特殊な事情がないかぎり) あり得ない。いっぽう、知合いになること (**getting to know somebody**) の過程には通常名前を知って覚えることが初期のステップとして含まれるし (なので記憶力にすぐれない大規模私立大学のゼミ指導教員は、毎年4月に新ゼミ生を迎えてこの義務づけをクリアしようと大汗をかく)、

ましてや、「コクル（求愛する）」という行いは、その対象である「他のだれでもないあなた」に固有のパーソナル ID を前提にし、それを高く評価（しばしば崇拜）することを含意する。ウディ・アレンが、最初の妻と話し合っただけで離婚をすることにしたとき、当時のニューヨーク州法ではカップルのどちらかに瑕疵がないと簡単に別れられないため、職場などでの身近な女性に不倫を持ちかけてはことごとく一蹴されたという、彼の漫談家時代の「情けない男」ものの受けネタがある（Woody Allen 『Standup Comic』 Rhino/Wea CD 1999）。アレン（小咄の登場人物としての）は、「ねえきみ、妻と別れるために不倫をする必要があるんだ、協力してください、悪いけど（nothing personal=これはパーソナルなことじゃないから）」と、正直に事情説明するというアプローチをとった。これがなぜ笑えるかといえば、もちろん、不倫も恋愛と同じく本来、双方のパーソナル ID がきわめてドミナントに関わる活動だからだ。

xii あるいは、エリクソン流にいうなら、通常はかなりの程度“役割統合”に成功し、全体感情としてのアイデンティティの感覚（sense of identity）をそなえた一種の心理的実体としてのパーソナリティ（Erikson 1959=1973）。

xiii 社会を構成するの最小の基礎ユニット（それ以上分割不能な in-dividual）としての、不変の、もしくはたしかかな実体的連続性をそなえた個人が実在するという信憑は、デュルケムの集合表象論（集合表象としての個人！）からゴフマンの相互行為儀礼論へとつながる自己論（A）の系譜の語り口を借りていうなら、私たちの近代社会の仕組みの不可分の要素の一つである個人主義のイデオロギーに根差している。

xiv ここで、はじめに（1節で）挙げた自我と自己の区分を再度強調しておいたほうがいいのかもしれない。社会的 ID もパーソナル ID もどちらも自己（self）（I と ME の ME）の話なのであって、認識主体の作用たる自我（ego）の話ではない。

xv たとえば、不案内な街のタバコ屋さんで、店番をしている中年女性に道を尋ねたら、タバコを買った客でもないのに、詳しく説明をしてくれたうえに、「途中ちょっとわかりにくいところがあるから」と孫を呼んで、目的地の近くまで案内するように指示してくれたとしよう。道を尋ねた人が、タバコ屋の店番の女性を「親切なタバコ屋のおばさん」として概念化し、「親切」というパーソナリティ属性（あるいは成員カテゴリー化の分析での用語を使うならカテゴリーのプレディケート述部）を彼女に帰属することは、決して不思議ではない。その人と彼女は「客」と「店の人」という役割関係にはないし、また、「道を尋ねる人」と「道を教える人」という一時的な役割関係は、通常そこまでの厚遇を教える側に義務付けはしない。だから、彼女の好意は、「親切さ」というパーソンとしての彼女の人格属性に起因するものとして理解するのが自然なのである。しかし、同じようなことが、別の役割関係の文脈内で行われたらどうだろう。たとえば、道を尋ねたのが、店番の女性の実の弟や甥であったとしたら、もちろん彼女の対応は親切には違いないが、親族間の義務を大きく踏み越えているとまではいえず、先の例のように、彼女の「親切さ」が際立つことはないだろう。「優しさ」や「慈愛」が「母」に、「勇ましさ」や「猛々しさ」が「軍人」に、といったふうに、ある種の心理属性は役割カテゴリーに帰属され、兵士が寄ってきた幼児を笑顔で抱き上げ菓子を与えたなら、その兵士の役割の背後にあるパーソンに「優しさ」が帰属されるだろう。とはいえ、いっぽうで、「あの人は軍人らしい剛直な性格の持ち主だ」、「彼女は看護婦、白衣の天使だけあって優しい」といったふうに、役割カテゴリーが逆接ではなく順接で、いわば感染のような形でパーソナリティへの属性帰属に使われることもあるだろう。こうした役割—パーソンのイメージの構成は状況依存的なものであり、そのようなものとして具体的経験的研究のトピックにされる必要がある。

xvi ホックシールドが感情労働論の文脈で取り上げた、旅客機の CA（客室乗務員）の心理的葛藤の事例（Hochschild 1983=2000 第 9 章）は、インフォーマントが自らの「感情管理」にまつわる経験を、役割 ID にくっつけて理解するか、パーソナル ID にくっつけて理解するかという、ID をめぐるエピソードの帰属の仕方に焦点を合わせたものだっていえる。

xvii 「パーソナル・アイデンティティ」というとき私が念頭に置くのは、最初の二つの考え方、つまり、明白な標識もしくはアイデンティティ・ペグ [個人のアイデンティティ構成のために使われるかけ釘—報告者注] と、そうしたペグを使って、その人のアイデンティティに帰属されるこ

とになるライフ・ストーリー上の諸項目の固有の組み合わせなのである。したがって、パーソナル・アイデンティティは、特定の個人を他のあらゆる人たちと区別し差異化することができるという想定と、そして、この差異化の手段のまわりに、綿菓子のように、単一の継続的な社会的事実の記録をくっつけ、からめつけることができ、そしてそれによってその手段は、さらにほかの個人史上の事実をくっつけられるねばねばした性状のものになるという想定とに関わるものなのだ。ここで、理解がたやすくはないのは、パーソナル・アイデンティティは、それがたった一つの花としての性質を持つがゆえに、社会組織の中で、構造化された、ルーティーン的な、標準化された役割をはたすことができ、事実をはたしているという点である。」(Goffman 1963=2001: 102, ただし報告者の訳による) これは、表象論的自己論の継承者としてのゴフマンの面目躍如たる論点である。私たちは、日常的やりとりの中でも、他者のパーソナル ID を同定したり構成したりするためにしばしばその人の個人史の事項を思い起こすが、いわゆる公式組織フォーマル・オーガニゼーションに関わる活動に参加するときには、たとえば履歴書やケースヒストリーや犯歴の記録などを作ったり参照したりファイルしたりするといった、よりフォーマルな手順に沿ったバイオグラフィカルワーク (Gubrium and Holstein 1995) にたずさわりもする。ちなみに、阪本 (2009) の「データ・ダブル」や「ファンタジー・ダブル」といった概念は、ゴフマンの自己論のこの側面を、「情報テクノロジー」が高度に発展した近年の状況を睨んで拡充する試みである。

xviii 人が固有名を持つこと自体がきわめて古くからある社会的慣行の産物だし、国籍や住民登録、婚姻届等々、近代国家に住まう私たちは、制度的な登録の裏付けによって「存在証明」を可能にされている。また、たぶんもっとも古いアイデンティティ・ペグである私たちの「生理的身体」(日常的には顔や体つき、声等々、さらに近年では指紋、声紋、DNA 鑑定等によってパーソナル ID の同定の用具にされる) もまた、人種や性別等の文化的に切り分けられ意味づけられた属性区分の刻印と無縁ではない(あるいは纏足や部族の祖霊の姿を彫ったタトゥーのような昔の慣行、歯列矯正や整形手術、ダイエット、ボディビルディングのような現代的慣行、もっと端的に、栄養状態のよい上流階級のほうが一般的に大柄だった以前の英国や、医療保険がないため前歯が抜けても放置している人が目につく現代の米国のイナナーシティエリアを思い起こしてほしい)、さらに、服装や化粧、仕草・物腰、話し方(「教養がありそう」かそうでないか、標準語を操るか方言で話すか)等々、私たちが「どんな人」かをやりとりの相手に示すパーソナル ID に関わる情報は、圧倒的に社会的な制度や慣行やコードに裏打ちされている。私たちがそれらをリソースとして、日常的にパーソナリティの連続性や一貫性を(その都度的にはあれ)達成できるとすれば、その一部分は、ゴフマンが『行為と演技』でパフォーマンス論として詳述したような、アクターの側の「見せる」と「隠す」が表裏一体の自己呈示をめぐる努力に依拠している。そして、そうした努力が可能になりそして実るためには、ある程度のスキル(ゴフマンのお好みのタームの機転 tact などにもそこに含まれる)とリソース、さらにいえば、「内面の自由」といった制度的アレンジメントが保証されなければいけない。それらが剥奪されればいかにパーソンとしての自己達成が困難になるか、また同時に、そうした困難な状況の中で人がどのようにして自分をパーソンとして提示しようと苦闘するかを雄弁に示したのが、『アサイラム』

(Goffman 1961b=1984) だ。言い換えれば、トータル・インテグレーション完全収容型施設では剥奪されもしくはその所持や利用を制限されるような、さまざまな資源や私秘的リソースな空間と時間プライベートを自由にできることが、近代社会における「人間の条件」なのである。

xix 「京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授らのグループは、6匹のチンパンジーと、1歳から3歳までの60人の子供を対象に、片目や鼻など顔のパーツが不足したサルサルの絵を用意。人間の子供は2歳半以降になると、まだ描線をうまくコントロールできないうちから、足りないパーツを描き足して顔を完成させる行動が見られたのに対して、チンパンジーでは既に描かれた輪郭などをなぞるだけで、無い部分を補う動作は一度も見られなかった。」(「チンパンジーと人間の子供のお絵かきを比較 カギは想像力?」Hazard Lab 2014年11月04日16時30分 <http://www.hazardlab.jp/know/topics/detail/7/8/7883.html> 2017-10-30 参照)

xx ゴフマンは、『スティグマ』(Goffman 1963)の通過作業パッシングについて論じたくだけで、面識も予

備知識もない視覚障害者にはじめて電話を掛けた人は、話の流れで視力に関わるトピックが出てこない限り (ex.「昨夜の川端の納涼花火大会の花火、お宅の方からもごらんになれましたか?」)、相手が健常者だと思ってやりとりをするだろうという例話を挙げた。本人にそのつもりがなくても、こうした状況下では、その人がパッシングを行ったと同じような事態になってしまい、ときには「カムアウト」のタイミングをはかることを余儀なくさせられる。ここで作動する、「ある人の障害について特段の情報がないかぎり、人は通常、その人を健常者と想定とする」という他者把握の推論方式をより敷衍したものが、報告者のいう「ふつう」の想定である。

xxi フレーム化慣行 (framing conventions) とは、ゴフマンのフレーム分析 (Goffman 1974) の脇役的概念をピックアップしたもののだが、報告者はそれを、今後の重要な研究課題として提案したいと考えている。小説、映画、ラジオやTVのドラマ、マンガ、アニメ、ロールプレイングゲームのそれぞれについて考えてみればわかるように、それらのフレーム (=虚構をリアルなものとして提示するために使われる既存のデバイス) は、社会的慣行とテクノロジーの複合によって成り立っており、したがって、たとえばアニメの登場人物がどのようにして受け手にとって「リアル」になるのかを明らかにするためには、そうした慣行/テクノロジー複合体 (これは安井・杉山がいう「メディア/社会インターフェイス」と重なり合う概念であるだろう →安井・杉山 1999:80-82) の詳細を、おそらくは比較的観点から記述する作業を積み重ねておかなければならない。もちろん、もっとローテクの作り物、たとえば話芸においても、落語と講談と浪曲のフレーム化慣行はどう違うのかといった解明作業が行われる必要があり、そして部分的にはすでに行われている (桂 1986)。

xxii 渡邊 (2010) は、心理学の性格研究の先達は日常的 (非学問的) な関心であったことを性格学の小史として示したあと、心理学における「性格」というタームの最大公約数を、「人がそれぞれ独自で、かつ時間的・状況的にある程度一貫した行動パターンを示すという現象、およびそこで示されている行動パターンを指し示し、表現するために用いられる概念の総称」(同書 p.23) として定式化する。人の「ある程度一貫した行動パターン」のソースとして、いっぽうに「役割」というものがあると考えられる以上、心理学は、どこかの時点で、ある行動パターンが人格に起因するか役割に起因するかという問いをつきつけられざるをえないだろう。しかしながら、人格を実体として想定しない構築主義の立場からみれば、話は違ってくる。「人格」は人びとが社会生活の中で、それを使って何かを達成する言語的なリソースなのであり、したがって「ある程度一貫した行動パターンという現象」の吟味よりも、人びとがある社会的文脈のなかでそういう「現象」が「ある」と認識して活動し、それによって一定の帰結がもたらされるという具体的事実を観察し、それについての考察を進めることが大切なのである。

xxiii この報告の報告要旨では、この日常の相互行為切片のフィールドノーツ作りと並んで、回顧的エスノグラフィーを調査技法として開発することを提案すると述べた。この語で報告者が意図するのは、調査研究を念頭におかず日常的にいそしんできた社会的活動について、のちに研究関心を持って過去に経験した出来事をできるだけ詳細に思い出し、時間をかけてフィールドノーツに準ずるものを書き、それをデータとして分析を進めるといふ、いわば回顧録的なエスノグラフィーの書き方である。しかしこれは、とくにゴフマン的研究だけに結びつくものではないので、別の機会に論じることにはしたい。

xxiv 米国の自称他称の構築主義者 (社会問題研究の分野のそれを含む) が、存在論や認識論に関わる哲学的議論の伝統について詳しくないままに、実証主義者 (positivist) =実在論者という単純なレッテルのみを用いて議論をしてきたおかげで、いわゆる構築主義論争やポストモダン論争は、悲しむべき混乱と不毛を積み重ねることになった。ハッキングの『何が社会的に構成されるのか』(1999=2006) は、哲学サイドからの、そうした混乱を補正する試みだった。構築主義論争の端緒を作った科学社会学者のウールガーは、構築主義(構成主義)を唯名論と等号で結び、それを徹底することを通じて実在論を退けるという方針を貫こうとしたが (Woolgar and Pawluch 1985a,b; Woolgar 1993)、それは構築主義にとっても、唯名論にとっても、必然的な選択ではない。そもそも論理実証主義やポパーの反証主義は素朴実在論ではなく、ある種の構成主義に隣接しているといってもいいような方法的立場だし(リップサービスの域を超えたところでそんな哲学的立場を「実践」している自然科学者がいるかどうかは別問題だ)、そして、唯名

論と、この世界にあるあらゆる対象が物理的性質をそなえているとする立場（精神と物質の二元論をとらない反デカルト的な「物理主義」）を組み合わせることも不可能ではない（中山 2009）。ハッキングが歴史的な存在論や動的唯名論（Hacking 1999=2006; 2002=2012）と呼ぶような哲学的立場が、社会学主義としての構築主義と親和性が高いと、報告者は考える（が、もちろん、そうした哲学的立場を掲げればそれで社会学の経験的探究が前に進むというわけのものでもないし、そしていうまでもなく、存在論や認識論についての哲学的立場がブランクであってもよい経験的知見を得ることはできる）。むしろ、哲学の議論の中で、構築主義的な調査研究にとって有益なのは、自然種と人工種という概念の種別だろう。ここでは詳説はしないが、おおまかにいって、自然科学が前者に属する概念が名指す対象、人文・社会科学が後者に属する概念が名指す対象を調査研究すると考えてよいなら、自然科学をモデルにしそれと同じやり方で社会科学の研究をやろうとする自然科学主義の調査方法論は、深刻な制約（悪くすれば setback）を課せられることになる（Winch 1958=1977）。人工種の中でも、とりわけハッキングが相互作用種と呼ぶような、人のいとなみとの間に「ループ効果」をもつ対象（Hacking 1999=2006）を研究する社会学者は、そうした対象の性質にマッチした視角と調査方法を確保しなければならない。1960～70年代のラベリング論から社会問題の構築主義にいたる展開は、思わず知らずのうちの、そうした社会学主義の方法的成熟へ向けての価値ある探索であったといえるだろう。